

備え、積み重ね、守ろう
—地震・津波を知り、大切な命を守る取組—

千葉県立長生特別支援学校長 鎌田 哲夫

1 学校の規模及び地域環境

本校は知的障害と肢体不自由の教育を主とする特別支援学校で、平成24年12月現在、138名の児童生徒が長生郡6町村、茂原市、いすみ市より主にスクールバスを利用して通学している。

所在地の一宮町は千葉県東部太平洋側のほぼ中央、九十九里浜の南端に位置している。本校は同町東浪見（とらみ）地区の海岸から約400m、海拔5mに立地し、2階床面の海拔は約8.6mである。

先の東日本大震災の際には本校の周辺でも海岸から約250m付近まで津波が到達し、浸水被害があった。

2 取組のポイント

- (1) 学校の実態（立地、児童生徒等）に対応した避難訓練の実施
- (2) 日常的な避難行動力の育成を目指した授業作り
- (3) 災害に強い学校を目指した環境整備
- (4) 災害に強い教職員の育成を目指した研修
- (5) 学校内外との連携強化

3 取組の概要

実施時期	計画事項	参加者
4月	○防災計画（組織、避難訓練、安全教育）の策定	学校
5月	○津波避難訓練①	学校
	○第1回担当者連絡会議	学校・地域住民・PTA役員・町防災担当者・福祉関係者
6月	○防災学習推進（～3月）	学校
	○津波避難訓練②	学校
7月	○防災用機器使用法研修会	学校
	○火災避難訓練	学校
	○心肺そ生法研修	学校
8月	○起震車体験	学校
	○第2回担当者連絡会議・1000か所ミニ集会	学校・地域住民・PTA役員・町防災担当者・福祉関係者
8月	○救急法研修	学校
	○防災教育研修会	学校・他校
	○応急手当普及員講習会	学校・関係機関

【地震と津波】 24年度指定校 ④県立長生特別支援学校

9月	○第3回担当者連絡 会議	学校・地域住民・ PTA役員・町防 災担当者・福祉 関係者
	○ミニ避難訓練	学校
	○転倒落下防止対策 一斉点検	学校
	○PTA研修視察	学校・保護者
10月	○ミニ避難訓練	学校
	○転倒落下防止対策 一斉点検	学校
	○防災教育実践報告会	学校・他校職員・ 地域住民・保護 者・町防災担当 者・福祉関係者・ 教育委員会他
11月	○ミニ避難訓練	学校
	○津波避難訓練③	学校
	○防災教育保護者公開	学校・保護者
12月	○ミニ避難訓練	学校
1月	○ミニ避難訓練	学校
	○津波避難訓練④	学校
2月	○ミニ避難訓練	学校
	○津波避難訓練⑤	学校
	○第4回担当者連絡 会議	学校・地域住民・ PTA役員・町防 災担当者・福祉 関係者
3月	○ミニ避難訓練	学校
	○津波避難訓練⑤	学校

5	谷口 元紀	前新浜区長
6	宮本 弘美	茂原市学校教育課
7	松島 栄一	支援センターつくも
8	渋澤 茂	長生ひなた
9	星山 早苗	外房こどもクリニック
10	野方 哲也	一宮中PTA会長
11	小高 直弘	一宮小PTA会長
12	倉富 英一	東浪見小PTA副会長
13	村松 雅美	PTA会長
14	鎌田 哲夫	校長
15	前楯 純一	教頭
16	南風野久子	教頭
17	渡辺 光治	教務主任
18	鶴澤 謙司	防災安全主任

5 具体的な取組

本校は開校以来、「地震・津波」を重点課題と捉え、児童生徒のかけがえのない命を守る防災教育を推進してきた。

以下には、平成24年度に行った取組の実際について述べる。

(1) 学校の実態（立地、児童生徒等）に対応した避難訓練の実施

本校の厳しい立地条件、児童生徒の心理的、身体的実態を考慮し、地震・津波に備えた避難訓練を、想定や方法を変更し繰り返し実施した。

① 近隣の高層建物への避難訓練

学校から約300m、屋上床面海拔17.2mの船橋市立一宮少年自然の家への避難訓練を実施した。建物3階まで、徒歩で安全迅速に移動すること、車椅子利用児童生徒の階段移動介助の役割分担、介助法の安全確保を確認した。(写真1)

4 担当者連絡会議

	氏名	所属及び役職
1	長谷川 信	県学校安全保健課
2	井手 剛	一宮町学校教育課
3	酒井 洋明	一宮町町総務課
4	長谷川恵利	一宮町社会福祉協議会



(写真1)

② スクールバス等を利用した内陸地避難場所への避難訓練(1)

スクールバス等の車両を利用し、内陸高台にあるゴルフ場への避難訓練を実施した。同所の最高海拔(建物最上階)68.8m、最短距離は約4kmであるが、途中踏切を含む隘路(あいろ)を通過するため、ルートを変更した。変更後の距離は約11.4kmとなるが、約7分走行すれば学校周辺の低地から離れ、海拔約20mの高台まで移動することができる。

車両を利用した避難には様々な弊害も予想されるが、移動に困難の伴う児童生徒を、できるだけ海から遠くへ早く避難させるために実施している。

車両へのスムーズな移動と速やかな出発、職員の役割分担の精選と徹底がポイントとなり、実施のたびに職員間で議論し、改善を重ねている。(写真2、3)



(写真2)



(写真3)

③ スクールバス等を利用した内陸地避難場所への避難訓練(2)

これまでに3回行ってきた車両利用の避難訓練を避難経路を変更して実施した。

休日に実施された一宮町防災訓練に合流し、これまで隘路(あいろ)として選択しなかった、最短距離ルート状況を把握することを目的とした。

事前の防災訓練住民説明会に参加した際には、本校の津波避難の実際を説明し、車両利用への理解を求めた。

今回、地域住民が参加することにより、経路の混雑、動線の交錯等を実際に近い状況として確認することができた。地域住民全員が参加したわけではないが、住民のほとんどは近くの別の高台に避難していたことから、本校が想定しているルートを避難移動する人数は少ないことがわかった。

今回の訓練により、町及び地域住民に本校の津波避難について一定の理解を得られたと考える。なお、休日実施のため、一部の職員のみでの参加となったが、来年度は休日の授業参観等と合わせて実施し、児童生徒及び保護者が参加できるような日程を調整したい。(写真4、5)



(写真4)



(写真5)

④ ミニ避難訓練

計画的な避難訓練以外に、毎月1～2回、予告無しのミニ避難訓練を実施している。地震の揺れに対する避難行動の育成を目的とし、緊急地震速報音を合図に訓練を行っている。「警報音＝地震の揺れ」と位置づけているが、「ティロンティロン♪」という音を聞くや否や、児童生徒は自ら頭を守ったり、身をかがめたり、安全な場所に避難したりすることができるようになってきた。(写真6)



(写真6)

また、学習中や休憩時間、校舎外での活動中など、様々な状況や場面で行うことで、職員間には、場に応じた避難行動を想定の

上、日常の支援に当たる習慣が身についてきた。なお、本校の避難訓練は開始の合図をすべて緊急地震速報音により行っている。従来の放送による実施ではなく、前述のように「警報音＝地震の揺れ」と位置づけ実施することで、より現実味を持たせるようにしている。

⑤ 今後の避難訓練

平成25年3月までに、役割分担と出発手順を修正したスクールバス利用避難訓練、スクールバスがそろっていない場合を想定した訓練、及び建設中の校舎屋上への避難訓練をそれぞれ予定している。

本校には3台のスクールバスがあるが、校外学習等で年間の3分の1程度、スクールバスがそろわない時間帯が想定される。

職員間で議論し、いざというときには職員の自家用車を利用しての避難も選択することとした。避難車両の配車計画、学級の避難経路を考慮した駐車場の配置などを検討、職員自家用車乗車口までの避難訓練をミニ避難訓練と連動して行うことにしている。(写真7)



(写真7)

また、これまで未設置であった屋上避難階段の工事が、現在、急ピッチで進められている。この完成を待ち、海拔12.3mとなる屋上への避難訓練も行う予定である。

各避難訓練実施後は職員アンケート、防災安全委員会等で課題を検討し、次回の訓

練に反映させるよう努めている。

納得のいく避難マニュアルの完成には至っていないが、常に検討を重ね、改善し、今できることを確実に実行することこそが、児童生徒の命を守る取組につながると確信している。

(2) 日常的な避難行動力の育成を目指した授業作り

児童生徒に危険から身を守る動作、行動を身につけ、自助の力を育てていくため、実態や発達段階に応じた授業実践を行った。日常の学習と関連づけ、その子なりに「防災」を意識できるような学習活動の工夫に努めた。

以下、実践の一部を記す。

① 小学部の実践

小学部では学部集会や朝の会などの時間に幼児向け防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」を利用し、揺れから身を守る姿勢や、津波からいち早く逃げる行動を学んだ。親しみやすい動物キャラクターのイラストを見ながら、頭を抱える動作や、早く逃げるために走る姿勢などを模倣する姿が見られた。(写真8)



(写真8)

また、全校で行う避難訓練以外に、学部単独でスクールバスや職員自家用車に乗車

する練習を定期的に行った。繰り返し行うことにより、児童は大きな混乱もなく、落ち着いてスムーズに移動できるようになってきた。(写真9)



(写真9)

② 中学部の実践

中学部では生活単元学習、総合的な学習の時間、職業・家庭の時間を利用し、学級及び学年単位で防災の学習を行った。

ア 生活単元学習での実践例

学校周辺を歩いて調査し、安全マップ作りを行った。高さのある建物や海岸との位置関係を知り、大きな地震の後、どこに避難するのがよいのか、自らの目と足で確かめることができた。(写真10)



(写真10)

イ 総合的な学習の時間での実践例

【実践例1】

写真や動画、読み聞かせ、液状化実験、などにより、地震・津波、避難行動についての学習を深めた。

更に、オリジナルの防災カードゲームを手作りし、災害に対応した避難動作についてゲームを楽しみながら体験的に学ぶことができた。(写真11)



(写真11)



(写真14)

【実践例2】

宮城県の古川支援学校と手紙による交流を行い、寄せ書きのメッセージを交換したり、前述の手作り防災カードゲームを紹介したりした。(写真12、13)



(写真12)



(写真15)



(写真13)

③ 高等部の実践

高等部では総合的な学習の時間、特別活動、保健体育の時間を利用し、学級、学年、学部で防災教育に取り組んだ。

ア 総合的な学習の時間での実践例

【実践例1】

簡易トイレ、ゴミ袋レインコート、ライフジャケット等、様々な防災グッズを見たり、触れたり、体験したりして、災害時の生活のイメージ作りをした。(写真16)



(写真16)

ウ 職業・家庭での実践例

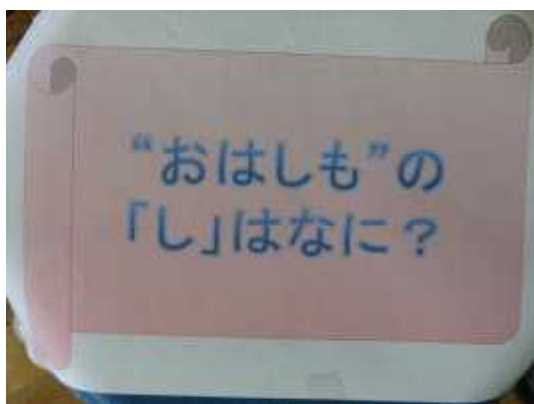
ミシンの使い方の学習で非常持ち出し袋として簡易リュック作りをした。袋の中味を話し合い、ミネラルウォーター、保存食などを買いそろえた。それらを納めたマイ防災リュックを教室に常備するようにした。

(写真14、15)

【実践例2】

防災すごろくゲームで楽しみながら防災

知識を身につけたり、災害への備えを体験したりすることができた。(写真17)



(写真17)

【実践例3】

校内の防災設備マップ作りをし、災害の備えについて学習した後、消火器製造工場を見学して実際の炎の消火体験をした。高校生の自分たちにできることを考えるきっかけとなった。(写真18)



(写真18)

イ 特別活動での実践例

【実践例1】

地震を知る防災集会として、起震車による地震の揺れを体験したり、消防署員の話の聞いたりすることで、地震の恐ろしさを実感し、地震発生時にどう行動すべきか、真剣に考えることができた。(写真19)



(写真19)

【実践例2】

近隣のいすみ市の協力を得て同市危機管理監内田豪氏による出前防災教室を実施した。一宮町で予想される津波や、津波から命を守るための方法について、スライドショーやビデオ、クイズ形式のやりとりが取り入れられたわかりやすい授業が展開された。生徒たちは津波の速さや威力、釜石の小中学生の避難の様子などを知り、真剣な表情で取り組んでいた。(写真20)



(写真20)

ウ 保健体育での実践例

「生まれてくれてありがとう」をテーマに、自分の名前に込められた思いを母親から直接聞いたり、生まれたばかりの子どもの映像を見たりして、命の誕生の素晴らしさや、多くの人に愛されている自身に気づくことができた。自他の生命を大切にしようとする気持ちを育てることにつながり、教育活動のあらゆる場面で実践できる防災

教育の具体例となった。(写真21、22)



(写真21)



(写真22)

④ その他の実践

全校集会では児童生徒の好きな〇×ゲームで防災知識を楽しみながら学べるようにした。(写真23)



(写真23)

また、起震車による地震の揺れ体験を前述の高等部の実践以外にも日程を調整して実施し、小・中学部の児童生徒も体験できるようにした。(写真24)



(写真24)

(3) 災害に強い学校を目指した環境整備

施設環境、ハードの側面からも災害に備え、児童生徒を取り巻く環境の安全を保障すべく、再確認の取組を実施した。

① 転倒・落下防止対策の徹底

昭和62年（1987年）の千葉東方沖地震以来、校舎内外の施設、備品等に対する転倒・落下防止対策は定期的に確認し、校舎の耐震検査、耐震化も完了している。

しかし、潜在する転倒・落下による危険から児童生徒を守り、スムーズに2次避難につなげるためにも、校舎内外の環境を再度チェックする必要がある。

地震防災アドバイザー川端信正氏、いすみ市危機管理監内田 豪氏のアドバイスを受け、月例の施設安全点検に加えて転倒・落下のチェック項目をより具体的に見直した安全点検を全職員で実施した。

点検項目から洗い出された潜在危険箇所は業者の協力を得ながら職員作業で危険防止対策を行った。

② わかりやすい掲示の工夫

避難の約束表、避難写真パネル、学部乗車バス表示等、児童生徒に伝わりやすい表示・掲示の工夫を行った。(写真25)



(写真25)

③ 地震情報収集への備え

高度利用者向け緊急地震速報受信ソフトを導入し、地震発生情報をできるだけ迅速に収集できるようにした。(写真26)



(写真26)

(4) 災害に強い教職員の育成を目指した研修

災害に強い教職員の育成を進めるために、職員研修の充実を図った。本校に在籍する、100名近くの職員の危機管理能力向上を図るため、各種の研修会を実施した。

地震防災アドバイザーの川端信正氏、東京大学地震研究所の大木聖子氏を講師に研修会、講演会を実施し、地震・津波防災について研修を深めた。その他にもトランシーバー等の防災用機器や消防設備の操作法、救助法、心肺そ生法など、各種の研修会を行った。(写真27)



(写真27)

(5) 学校内外との連携強化

児童生徒の命を守るための防災教育は学校・保護者・地域の連携により、実効あるものとなることは明らかである。本校でも各方面との連携強化を推進した。

① 一宮町との連携

町防災担当部局とはこれまでも連絡を取り合ってきたが、本年は防災教育公開事業の担当者連絡会議に4名の委員を委嘱し、各部署との連絡をより密にした。また、町合同避難訓練への参加、1000か所ミニ集会での講師派遣などでも協力を得た。

② 消防署との連携

広域市町村圏組合消防本部、及び各署との連携を図った。避難訓練の指導、地震の揺れ体験、消火体験、煙ハウス体験等で全面的な協力を得た。(写真28)



(写真28)

③ 学区内住民、機関、団体との連携

既存の「開かれた学校づくり委員会」と防災教育公開事業担当者連絡会議を共催とし、本校の防災教育の取組について協議を重ねた。また、1000か所ミニ集会では一宮町社会福祉協議会の長谷川恵利氏を講師に「地域で取り組む防災教育」について講演会を開催し、各方面の参加者による活発な意見交換を行うことができた。(写真29)



(写真29)

④ 保護者との連携

P T A研修視察を今年度は防災研修として実施し、東京臨海総合防災公園内のそなエリア東京を訪ねた。被災体験シミュレーションや身近な素材を生かした防災グッズ作りなどを通して、家庭防災の再確認への意識を高めることができた。(写真30)



(写真30)

また、防災教育公開事業の実践発表会、及び当日参加できなかった保護者対象の保護者公開を実施し、前述の東京大学 大木聖子氏の講演（後日実施はビデオ上映）や本校の防災教育の取組説明を行った。

6 成果と今後の課題

本校の防災教育について振り返ると、これまで積み重ねてきた実践のよさを生かしながら、課題や問題点を明らかにし、それらを改善して更により方策を実施する望ましいサイクルが確立されつつあると実感している。

避難訓練や授業作りを始めとした継続的な取組を続けることで、職員間の共通理解が進み、様々なアイデアを出し合いながら新たな試みを積み重ねていくことができた。取組を多くの目で見直し、全職員で今できることから確実にいき、前に進んでいこうという気運が高まっている。

児童生徒に目を向けると、防災教育というイメージしにくい学習に対しても、その子なりに見通しを持って取り組めるようになってきた。避難訓練などは、児童生徒にとって普段の生活と異なる活動であるものの、繰り返し行うことで落ち着いて取り組めるようになってきている。

一方で、まだ見直しの十分でない課題も残されている。

先日実施した防災セルフチェックの結果からも見直しや新たにに取り組むべき課題が浮き彫りになっている。特に地震・津波の二次避難後の、保護者との連絡方法及び引き渡しについては、検討の余地がある。

本校の場合、立地条件から学校を避難場所とすることは困難なため、引き渡し場所、備蓄品等の決定に際しても、特別に連絡調整が必要となる。休日学校参観日等の機会を利用した引き渡し訓練の実施や関係各機関との折衝を継続し、現段階での最善策が早急に確立できるよう対応を進めている。